

---

# 東方靈異記

沢藤 蜜柑

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方靈異記

### 【Nコード】

N0833Y

### 【作者名】

沢藤 蜜柑

### 【あらすじ】

ここは平和な博麗神社。

いつものようにダラダラと過ごしていた霊夢のもとに、一通の封書が届きました。

差出人はどうやら人里に住む人間の様です。

面倒だな、と思いつつも久々のお仕事だからと霊夢は里へと下って行きました。

すると・・・

## Stage 0：ことの始まり（前書き）

以前連載していたヤツの筋書きがようやくまとまったので、とりあえずプロローグだけアップしてみました。

細かい設定はちよくちよく変わっていると思いますが、博麗神社に巫女さんが2人いるとかその辺は変わっておりません。

長い目で見てください。

よろしく願います。

## Stage 0…この始まり

むかしむかし

あるところに鬼の姉弟がいました

早くに大妖怪であった両親をなくした姉弟は

親の血を色濃く受け継いだ、他とは違い力の強い鬼でした

特に弟の力は異質で

鬼の間でも恐れ、忌み嫌われていました

それをずっと近くで見っていた姉はとうとう耐えきれなくなり

弟を連れて仲間のもとを離れる決心をしました

これ以上、傷つく弟を見たくなかったのです

弟の強すぎる力を悟られないよう

仲間のもとを離れる前

姉は仲間からくすねてきた、鬼の7つの秘宝に

強すぎる姉弟2人の力を封じました

単体で一番弱い種族である人間として生きようとしたのです

赤き扇には『霊』の力を

蒼き箒には『魔』の力を

黄の杖には『仙』の力を

藍の冠には『妖』の力を

翠の衣には『天』の力を

紫の器には『鬼』の力を

橙の玉には『神』の力を

それぞれ封じた

新たな土地にたどり着いた姉は

それを誰にも見つからぬ場所へ隠したという

Stage 1 1: 幻想郷の博麗神社

「お兄ちゃん！」

私がまだ10歳だったころ。

里のはずれでお兄ちゃんと2人で暮らしていた私の家は、ある日突然妖怪に襲われた。

「極限にオレが引きつけている！今のうちに里まで走れ！」

「で、でも……」

「行けっ！」

その時はお兄ちゃんに言われるまま、とにかく里の方へ走った。

「死んじゃダメだよ、お兄ちゃん！」

「この程度でオレは極限死なん！早く行け 京子！」

誰か里の人を呼ばなくちゃ。

そう思つてとにかく私は走り続けた。

走っている途中、私は自分と同年くらいの男の子に出会った。暗くてよく見えなかったけど、私の知らない子なのは確か。

「あつ。誰か分からないけど、助けてください！」

「？」

私はあわててその子に、今自分が走っている訳を話した。里の人を呼びに行ってもらおうと思って言ったの。でも途中でこけちゃって。盛大に地面とご対面した。かつこ悪いなあ、私。

「.....」

と、男の子が助け起こしてくれた。わあっ、優しい子。

「えっと・・・あっ！」

直後その子は走り出した。里に人を呼びにいつてくれたのかなと思っただ。

でも、男の子が走っていった方は今私が来た方角。つまりお兄ちゃんのいる方へ走っていった。慌てて止めたけど、男の子は止まらない。

「ま、まって！危ないよ！」

どうしようか迷ったけど、私は男の子を追いかけることにした。お兄ちゃんが大丈夫かも不安だったし。

「はあ、はあ・・・あ、あれ？」

私がようやく家に戻ってきた時、あの男の子も妖怪いなかった。

その日以来、お兄ちゃんの行方は分かってない。

「!」

「ふああああ・・・おはよ、京子。今日は起きるの遅かったわね。」

夢かあ。

びっくりした!

「おはよう霊夢ちゃん。ごめんね、昨日ちょっと書きものしてて寝るのが遅くなっちゃったの。」

「別にかまわないわよ。さて、“掃除のフリ”でもしてきますか・・・

「・

懐かしいな。

あのころのことを夢に見るなんて、何年ぶりだろう?

お兄ちゃん・・・。

今更考えても遅いけど、やっぱりあのとき死んじゃったのかな。

「朝ごはん食べなきゃだめだよ、霊夢ちゃん!」

あの男の子、どうなったんだろう。

・・・ま、いつか!

きっとお兄ちゃんもあの男の子も、どこかで生きてるはずだって。

そう、信じてるから。

幻想郷。

それは忘れられた者達がたどり着く最後の楽園

遠い遠い東の島国で

完全に外と隔離された独自の文化を築き上げ

誰もが穏やかに暮らしていた

そんな幻想郷と外をつなぐ唯一の神社があつた

名を『博麗神社』

この特別な神社には、2人の対照的な巫女が暮らしていた。

「あーあ・・・今日も0円か・・・。」

博麗神社を仕切る巫女・博麗霊夢の最近の悩みはもっぱらお賽銭の

こと。

だって誰も入れてくれない、というか誰も来ない。

霊夢の日頃の態度が問題なのだとは思っけれど、本人に直そうという気配はなし。

「はあ………ん？」

ため息をつきながら境内を見ると、入り口の石の上に白い何かがかかっていた。

どうやら手紙のようだ。

「博麗神社の巫女様？私宛に手紙なんて……珍しい事もあったもんね。」

開けてみると、そこにはこんなことが書かれていた。

### 博麗神社の巫女様

初めまして。

今回はお頼みしたいことがあり、このような方法をとらせていただいた次第でございます。

私は里で骨董屋を営ませていただいております。

その折、不思議なものを手に入れたのです。

何か不思議な力を持っているようで……ただのしがない骨董屋の私には手に負えません。

つきましてはどうか、巫女様のお力で何とかしていただけられないもの

でしょうか。

もし何とかしていただければ、里に入っすぐの所にある骨董屋までお越しください。

勝手なお願いですみません。

私は足を悪くしていて動けないのです。

どうか、どうかお願いいたします。

骨董屋 八兵衛

「……っていう、激しくめんどくさい予感しかしない手紙が来てたんだけど。行く、京子？」

折角のお仕事の依頼をめんどいいうなや。

「行こうよ！今から行こう！」

「うん……まあいいわ。ちょっと準備してくるからまってて。」

御被い棒や御札を携え、博麗霊夢と笹川京子は久々に2人そろって神社をでたのでした。

おもえば、この手紙がのちの2人の運命を変えたのかもしれない。

Stage 1 1: 幻想郷の博麗神社（後書き）

（もつひとりの楽園の巫女）

『みなみがわきよ笹川京子』

ありとあらゆるのを探し当てる程度の能力

15歳の巫女見習い。

真面目で毎日の修行を欠かしたことはない。

甘いモノ好きでとくに和菓子（おまんじゅうなど）や洋菓子（ケーキなど）が好き。

生き別れたと信じている兄とは、未だ会えずじまい。  
その時に会った少年の行方も探している。

元ネタ：家庭教師ヒットマンREBORN！

## Stage 1 2：人里の古びた骨董屋

「ごめんくださいーい！」

「博麗神社の者よ。手紙を見てきたんだけど、誰もいないの？」

手紙にはいつていた手書きの地図を頼りに、2人は件の骨董屋へ赴いていた。

ところがそこに人気は感じられない。

今は出かけているのだろうか。

「でも、この手紙をくれた八兵衛さんて足悪くしてるって書いてあったよ。」

「寝てんのかもしれないわね。」

もう一度出直そうと思い、2人が店を出ようとした、その時。

「ちょっとまって、あなた達巫女さんかな？」

後ろから声がかかった。

声からして女のようなだが、聞き覚えはない。

2人は警戒しながら振り返る。

「……あなた誰？まさかアンタが手紙をくれたはちべ」

「違うよ！わたしの名前は高町なのは！な・の・は！ー！」

店の奥から現れたのは、茶色の髪をツインテールにまとめた可愛ら

しい女の子。

見た目は13歳、と言ったところだろうか。

どう見ても“ハチベエ”という顔はしていない。

ここで、名前を聞いた京子が反応した。

「なのはちゃん・・・？どこかで聞いたような・・・」

が、それを無視して霊夢が前に進み出てきた。

「それで、アンタここで何してんの？私らはハチベエって人に仕事で会いに来ただけなんだけど。」

もうちょっと優しく尋ねられないのか、お前は。

本当に神さまに使える女性“巫女”なのか疑いたくなる。

「あーえっと、今ハチベエさんは絶対安静にしてるってお医者様から言われてて・・・。」

なんでも、風邪をこじらせてしまったため今は奥で寝込んでいるのだとか。

「それで、わたしのところに『代わりに巫女さんに会ってほしい』ってご依頼をもらったの。」

「依頼？アンタ何者？」

霊夢が腕組みして訝しげに尋ねると、向こうは明るく答えてくれた。

「そうだね、自己紹介しなかったの。初めまして！里で“万乃高町”<sup>まのたか</sup>という何でも屋さんを経営している『高町<sup>たかまち</sup>なのは』です。こう見えて、今年で54歳の新米魔法使いなの。よろしくね！」

54歳で新米とは……。

ちなみに魔法使いという種族の平均年齢は人間よりもはるかに長い。もつとも、完全な魔法使いならば完全になったその時から成長が止まるので寿命など存在しないとのこと（つまりは不老不死）。

幻想郷にあるとある古文書によると、完全な魔法使いになるにはとある魔法を習得しなければならぬとか何とか。

まあ、そんなことは今はどうでもよい。

「こちらこそ初めまして！博麗神社で巫女修行中の『たむがわきよつこ 笹川京子』です。よろしくね」

「同じく巫女の『はくれいれいむ 博麗霊夢』よ。んで、私たちに調べてほしいモノって何？」

アンタには興味がないと言わんばかりに、霊夢は手をぬつと差し出した。

なのはは驚いたようだが、特に問うこともなく依頼の品を懐から取り出した。

でてきたのは手のひらに収まるくらいの桐の箱。

「この箱が依頼品？」

「ちがうよ。中身だけ。」

かぱつとなのはが開けて見せたのは、真っ白い勾玉。見たこともないほど美しい。

この埃っぽい骨董屋にはあまりにも不釣り合いな美しさだ。

「なにこれ？」

「それが分からないからお手紙が来たんだよ、霊夢ちゃん。」

それもそうかと霊夢はじつくりと観察し始めた。

3分ほどたったところで、霊夢が勾玉を戻してから再び口を開く。

「ところで、これ誰が持ってきたの？」

「えっ？」

予想外の質問だったのかなのはは困惑した表情で考え込んだ。

ここで京子が、言葉足らずの霊夢の代わりにと説明をし始める。

彼女曰く、足の悪いハチベエさんが見つけてきたものとは思えないとのこと。

「ヨボヨボのじいさんがわざわざ森とか山とかに行くわけないですよ。だったら答えは一つよ。」

「そっか、ここは骨董屋！」

「誰かがこれを売りに来たんだね。その人からなら、詳しい御話聞かせてもらえるかもしれないね！」

「そっいうこと。」

納得して明るい表情を浮かべたのはは、2人にそこで待つようにと促して奥へと引込んだ。

その間、2人はこの勾玉についてもっとよく調べてみる事とする。表面はつるつるでとても丁寧に磨かれており、大切に扱われていたことがうかがえることから盗品の類ではないだろうと2人は断定した。

実際、この主人であるハチベエが鑑定してメモしたとおぼしき用紙にもそのようなことが書かれてあった。この紙はカウンターにぽつんと放置されていたものだ。

「誰が売ったのか分かったよ！」

ここで、ようやくなのはが戻ってきた。  
手には一枚の書類。

丁寧に書かれており、どこで見つけた者がまで事細かに記されている。

どうやら八チベエさんとはとても几帳面な人物のようだ。

「ええっと。そらまざん？の入り口で桐の箱に入った状態で発見されたんだって、霊夢ちゃん。」

「京子・・・これは『そらまざん』じゃなくって『空魔山』って読むのよ。」

「この山、妖怪たちでもめつたに近づかない不思議な山なの。どうしてこんな山の入り口に？」

発見して売りに来た人物は、どうやら散歩でしょっちゅう近くを通っている物好きのようだ。

書類にはそう書かれていた。

あとは、この勾玉の簡単な絵と売りに来た人物の名前と住所。

「売りに来た人、『初音青果店』はつねせいかてんで住み込みのアルバイトしているみたいけど・・・どうしよう、私このお店どこにあるか知らないよ。」

「わたしも知らないわ。あんたは？」

住所を確認してみるものそこにはお店の名前しか書かれておらず、いくら人里が他に比べて狭いとはいえ分からない。

途方に暮れる2人だったが、なのはの言葉で希望をとりもどした。

「そのお店うちの近所なの！店長ともそれなりにお付き合いがあるよ。」

「なのはちゃん、道案内頼めるかな？」

優しいなのはのおかげで、2人はなんとか情報収集ができそうだ。

「とりあえず会ってみましょ、この“優丹”<sup>ユウタン</sup>って子に。」

ハチベエさんの書いた書類。

そこには、変わった大きな白い帽子をかぶってほほ笑む少女の簡単なイラストが描かれていた。

Stage 1 2：人里の古びた骨董屋（後書き）

〈幻想郷の掃除屋〉

『たかまち高町なのは』

物質を動かす程度の能力

54歳の新米魔法使い

なんでもや万乃よろずのたかまち高町の女主人

彼女の作るケーキはとても美味なことで有名

スペルカードは特に威力重視の砲撃系を好んで使う。  
パワー系統のものが多く所は魔理沙と似ている。

元ネタ：魔法少女リリカルなのは

Stage 1 3：初音青果店

ちりんちりん。

骨董屋には少し似合わない感じの軽快な鈴の音が、店全体に響き渡る。

「いらつしゃーい。」

「……。」

入ってきたのは中学生ほどの少女。

紫がかつたセミロングの綺麗な髪を揺らしながら、彼女は周りを一切見渡さず真っ直ぐカウンターの方へ歩いて行った。

「ん？あ、もしかして常連か。悪いな、今ジイサン寝込んでるんだ。んで、代わりに私が店番してるんだぜ。」

「……あの。」

「ああ、私か。私は魔理沙！よろしくなっ！」

カウンターに座っていた魔女っ子という感じの少女は、ニカッと笑いながらそう名乗った。

が、客の方はそれをスルーして簡潔に用件だけを述べる。

「白勾玉……売って。」

「ここだよ。」

なのはに連れられて2人がやってきたのは、その名の通り青果を売っているお店。

ただ、今日は開いていないようだ。辺りは静まり返っている。

「・・・ホントにここ誰か住んでんの？」

「住んでるよ！わたしの家はそこなの！」

疑う霊夢に、なのはは自分の家を示すことで言い返した。まあそれほど人の気配がなかったのである。

「・・・いないのかしら。」

「今日はお店、おやすみみたいだね。」

残念そうに京子がつぶやいた。

「また明日出直しましょ。ちょうど眠くなってきたし、疲れたし。」

霊夢が欠伸をしながらそう言ったことで、なのは達がようやく今が夕方であることに気がついた。

早くしないと、妖怪に襲われても文句の言えない時間になってしまう。

「じゃあ私たち帰るわね。」

「ばいばい、なのはちゃん！」

「またね、霊夢ちゃん京子ちゃん。」

こうして2人は、何でも屋なのはに別れを告げた。  
目指すは神社。

本当にまずいことになるので急ぐ。

と、ここで霊夢が重大なことに気がついた。

「あら？勾玉は？」

「え・・・もしかして骨董屋さんに置いて来ちゃったの？」

普段なら急いで引き返すところだが、本気で今は時間がない。

「明日また行くんだし、その時でいいわ。」

「うん、そうだね。」

巫女さんは勾玉の行方を気付かぬまま、帰路についた。

次の日。

「え？勾玉が昨日の夕方買い取られただあ！？」

「霊夢ちゃん落ち着いて！」

大事件が起きました。

「なのは、誰がその時店番してたのよ。この店の主人は昨日一日動けなかったんでしょ？」

「今日もだけどね。」

「う、うん。魔理沙ちゃんっていう私の・・・」

幼馴染なんだけど。

なのはがそう言い終わる前に、霊夢が叫んだ。

「あんのバカ魔理沙ああっ！！！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0833y/>

---

東方靈異記

2011年12月11日22時46分発行